

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 川合康三著 『生と死のことば
中国の名言を読む』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮内, 克浩, Miyauchi, Katsuhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000406



生と死について中国の先哲や文人が語り綴ったことばを、書き下し文・原文に平明な訳を付して紹介する。要所に字句の精確な訓詁的解説を行い、それぞれのことばが紡がれた経緯を丹念に辿り、ことばへと結晶化されてゆく思念に迫る。全十二章、あとがきに代えた読書案内と関連年表とが添えられる。各章の排列は以下の通り。

- 一 「生とは何か、死とは何か」／二 「生は仮の宿り、死は永遠の帰着」／三 「生ははかない」／四 「死を前にして」／五 「生への執着」／六 「死は必然」／七 「死への恐れ、死への憤り」／八 「亡き人を悼む」／九 「不死の希求」／十 「死を恐れる陶淵明」／十一 「死を戯画化する陶淵明」／十二 「死を乗り越える」

本書の取材は広範囲に亘り、かつ多様。論孟など儒家經典や

史漢などの史書、老莊をはじめとする思想・宗教に渉る文献、さらに『文選』に載録される漢魏六朝の作品や唐宋期の作家の詩文に及ぶ。時代的には先秦（『詩経』）から明（『帰有光』）に至るまで優に二千年を超える、豊饒な中国古典の世界から、珠玉のことばが選ばれている。これらは、寄するが如き人生に対する先人の苦悩や煩悶・諦念が込められたことばであるとともに、私たちに生の意欲を掻き立て、死を乗り越える力を与えることばでもある。

しかし、本書は単なる箴言・格言集ではなく、ましてや生き方指南の書でもない。例えば中国の詩における悼亡詩・閨怨詩の特殊性、古詩と樂府に底流する情感の相違、物語化された故事と叙事詩との関係など、著者は文学作品に底流する情感、主題の特徴や史的展開などの解説を随所に、またふんだんに盛り込み、時に、憶良・長明・中江兆民・二葉亭・漱石・紅葉・宮沢賢治・中島敦の作品に言及する。さらにアラブ・ヨーロッパ圏の文学にも触れながら、中国文学の際だった特色を浮き彫りにする。いわば中国の古典に伺われる死生観を軸に据えた中国文学の概説となっているのである。

〔岩波新書（新赤版一六八三）、二三四頁、岩波書店、二〇一七年十月発行、定価七八〇円＋税〕